情報機器で競争力磨く

上神谷梱包高速

【大阪】上神谷梱包高速（桑田信子社長、堺市西区）は、情報機器を積極的に活用し、業務の効率化や営業面のレベルアップにつなげている。40年前に大型のオフィスコンピューターを導入して以降、ファクス、パソコンなど黎明（れいめい）期の変遷の中、新規及び入れ替えを順次推進。デジタルタコグラフも同業他社に先駆けて取り入れ、当初のもくろみ通り、燃費向上と事故防止で確かな成果を上げてきた。

創業者の先代が、情報機器の重要性を早くから認識していた結果、当時、運送会社に導入事例が乏しかったオフコンを使い、倉庫の入出庫に係る事務作業量を大幅に削減した。デジタコでは、国やトラック協会の助成金を利用して全車に装着。日報に走行データを反映できるようGPS（全地球測位システム）と連携させている。

業務管理の効率化に効果を発揮

創業時から重要性を認識

4月からはデジタコを最新型に更新。今日では、燃費を伸ばす運転の工夫や速度の抑制に対するドライバーの認識が高まり、互いに修練する職場環境を生み出した。毎年1回、成績優秀者をたたえる表彰式を行い、意識向上が持続するように努めている。

今後の課題については、北九州市門司区の新門司北営業所と大阪の南港、泉大津港を航路で結んだヘッドレス輸送を手掛けるが、限られたヘッドと台車、荷物とのマッチングが難しく、いまだに情報化への道のりが険しい実情を挙げた。

桑田社長は「ドライバーには、情報機器の取り扱いや重要性を本人が納得するまで粘り強く指導している。現在は、輸送、倉庫、業務を各分野で個別に運用しているが、近い将来に配車から経理まで一元管理したい。高齢化も目立っており、人材確保が急務だ。政権交代で景気浮揚に期待が高まる中、引き続き営業基盤の強化を図っていく」と話している。

（渡辺　弘雄）